セミナー論文

指定討論

ルール違反と感情

宇津木成介 奈良学園大学ビジネス学部

Breaking the rules and emotions

Narisuke Utsuki (*Faculty of business, Naragakuen University*)

A set of morals is a possible mechanism by which to maintain our society. Heath (2008) argues for the importance of conformity to norms from a rationalist position. However, norm conformity can also be explained empirically. Mimicking one another's behavior is nothing more than following rules that already exist. This behavior always helps us avert potential loss. We experience guilt about our own rule-breaking behavior and anger or envy toward another's. Thus, emotions encourage following rules and help lessen our risks.

Key words: norm conformity, rules, rationalism, empiricism, emotions

今回の研究セミナーの主要な関心は、道徳的規範の成立と維持のメカニズムであった。道徳 (moral) は、他者に対する行動、つまり社会的行動について語られる。道徳心は、かつては良心とよばれ (柘植, 2003)、あるいはFreudによって超自我と呼ばれた (Frank, 1999)。道徳的規範に違反した場合に多く体験される感情は、罪悪感や後悔である。規範に違反した他者に対して多く体験される感情は怒りや妬みである。このことからだけでも、道徳の問題は、感情心理学の領域で議論されてよい。社会が、個人の行動を制約するルール (道徳的規範) によって維持されているとすれば、ルール自体はどのようにして生じ、また維持されるのかという問題が生れる。

発表者の発表主旨

規範同調性について 近代の社会科学は、Hobbes (1651 水田訳 1992) に倣い、人間を、“自分の利益を最大にする手段を選択する合理的な個人”と見なしてきた。このような見解に対する反論の一つとして、“人は最初から社会的・愛他的である”という、Hume (1739 大槻訳 1957) の共感への回帰がある。

Heathは、社会性を生み出す動力として、“共感”を経験論的概念として否定し、合理論的概念である“規範同調性”を提案した (Heath, 2008 瀧澤訳 2013)。セミナーにおける瀧澤の発表は、Heathの主張を踏まえたうえで、その主張の背景について解説するものであった (瀧澤, 2013a, 2013b)。

利他的罰について ルール違反者にはなんらかの形で罰を与えてルールを維持する必要がある。ルール違反をとがめる権力が存在せず、被害者に加罰能力がないとき、第三者は自分のコストで違反者を罰する“利他的罰 (Third-party punishment: TPP)”を引き受けるはずであるという議論がある (Fehr & Fischbacher, 2003; Ohtsubo, Masuda, Watanabe, & Masuchi, 2010)。セミナーにおける大坪の発表は、実験事態においてTPPが生じるかどうかを、新しい実験事態において検討したものであった。

指定討論の内容

われわれ人間が自動的に規範を順守する傾向にあることそれ自体は、経験主義の科学である心理学の知見によっても示すことができるだろう、ということが、指定討論の主旨である。

Hobbesは、自己愛によってのみ動かされる人間の自然な状態である、“万人の万人に対する戦争”状態から抜け出すために、理性の合理的な判断により、人

Correspondence concerning this article should be sent to: Utsuki Narisuke, Faculty of Business, Naragakuen University, 3-12-1, Tatsuno-kita Sangou, Ikoma, Nara 636-8503, Japan (e-mail: utsuki@kobe-u.ac.jp)

は、ルールによって相互の行動を制約するのだという (Hobbes, 1651 水田 訳 1992)。Hobbesにおいては、社会集団を成立させるためのルールは、できればないほうがよいが、現実には、やむを得ないものと考えられている。これに対して、LockeやSmithは、人はもともと社会的に作られていると述べた (Locke, 1689 宮川 訳 1968; Smith, 1759 水田 訳 2003)。しかしSmithの場合においても、特段のルールなしに、人間の本性のみによって人々がうまくやっていけると主張されているわけではない。とりわけ、正義の侵犯に対しては、厳しい規則が必要であるとされる。

法則と規則の順守

自然界にある法則と社会における規則の中間に、人為的に改変することのできない、人間の行動に関する普遍的な法があると考えられている。これは自然法と呼ばれる。例えば同一社会集団内においては、“汝殺すなかれ” “汝盗むなかれ” など、人間の本性とみなされうる特性に依拠する規範は、自然法的に理解される。

自然の法則を無視した行動は、不可能であるか、あるいは自然に不利益を伴う。自然の法則の範囲内で行われる行動の場合、実行可能ではあっても、人為的に作られた規則に反する場合には処罰される。規則に従った行動をとるかぎり、われわれは不利益（罰）を回避することができ、また、場合によっては利益（賞）を得ることができる。スキナー箱の中の動物は、人為的な強化スケジュールについてあらかじめ知識を持っていないが、強化随伴性を手がかりに、規則に準拠した行動を行うことができるようになる。つまり動物は、賞罰によって規則を発見する。

人間の集団における規則は、多くの場合、円滑な社会生活を実現するために作られており、規則の順守は、特定個体ではなく、社会の成員全員にとって利益をもたらす（規則の合理性）。規則を守らないことで特定個人が利益を得ることを防ぐため、ルールにはしばしば強制力（サンクション）が準備されている。

観察学習

人は他者の行動を、おそらくは自動的に模倣する。就学前の子ども（2歳-4歳）を同輩と一緒に食事させると、同輩の行動にあわせ嫌いな野菜を食べ、あるいは好きな野菜を食べないという同調行動が観察される (Birch, 1980)。モデリングにおいては、モデルの行動に賞が与えられなくとも、罰が与えられないというだけで模倣行動が生じる (Bandura, 1965)。ある場面においてモデルの特定の行動に罰が随伴しないとすれば、その特定行動はその場面における“行ってもよい行動”であると判断される。ある場面において取りうる多様な行動の中から、損失のない行動として、“行っ

てもよい行動”を選択することは、有利である。実際、近年の行動経済学の実験から、人は利益を得る行動よりも、損失を避ける行動を優先的に選択することが示されてきた。

時間の節約と慣行

規則に一定の合理性があれば、個々の場合に不合理が発生しても、判断に要する時間が十分に得られないとき、規則通りの行動をとることが推奨される場合がある。マニュアルと言われるものが、これに当たる。セミナーでは、例としてトリアージを挙げた。

規則には、合理性がなくても、いったん定められ、多数によって採用されて慣行となると、罰がないかぎり、実行され続けると考えられる。Darwinの進化論的説明によれば、現在残存している組織や機能は、それが有害に作用するものでなければ、淘汰の対象にはならない。伝統的な儀式や作法のうちには、それが始まった時点では何らかの合理性があったにせよ、現在は単なる仕来りであり、そうしなければならないという根拠はないが、それでも集団の成員によって順守されるものが少なくない。つまりどのような例においても、既存のルールを守ることによって罰が生じることはないと考えてよい。

利他的罰

利他的罰に関しては、そのような罰が生じることが実験的に示されることを前提として、筆者は、感情心理学の立場から、利他的罰とともに生じやすい感情は、怒り（義憤）であるか、あるいは妬みであるかについて検討する必要があるだろうと述べた。生じる感情が前者であれば、公正さの侵害を放置しない正義の現れと考えることができるし、またもし妬みであるとすれば、罰は必ずしも利他的とはいえず、ルール違反によって利益を得た者に対する、個人的な報復と考えることができるだろう。

おそらく大坪の報告で言及されると思われるが、“ルールの内容にかかわらず、ルールを守らない者に対して発動される（加罰的な）感情反応がhard-wiredに存在する”という着想は、重要であると思われる。Heathが述べるように、たしかに集団で生活する動物には同調バイアスといわれる性向があり、集団で生活する生物は、それぞれの個体が、集団の行動に同調するように自然によって作られていると考えてよいであろう。しかし、同調バイアスさえあれば集団が形成され、維持されと考えることには無理がありそうである。集団に同調しない個体に対して、自然は直接に罰を準備しているとは言えず、場合によっては、集団に同調しないことによって、個体は、利益を得ることがありうるからである。

したがって、集団に同調することが損失を回避する

ために有効であるとしても、集団に同調しない行動をとる個体があった場合、それを放置せず、即時的かつ直接に、当該個体に損失を生じさせるメカニズムが、あらかじめ準備されている必要がありそうに思われる。そのように考えれば、大坪の実験例においては、実験参加者が体験する感情は妬みではなく、怒り—理由のない腹立たしさ—ということになるだろう。つまりわれわれは、掟を破った者がそれによって利益を得たかあるいは損失を被ったかにはかかわらず、掟を破ったことそれ自体に罰を加えようとするのではないかと考えられる。逆に、掟に沿った行動であれば、利益を得た者に対しては妬みや賞賛が随伴し、損失を被った者に対しては軽蔑や同情が随伴するにしても、それらの者に対して怒りが生じることはないのではなかろうか。

ま と め

遺伝子への淘汰の圧力は個体レベルにおいてのみかかるという立場に立つと、集団に同調しない個体に罰を与える行動をとる個体が生存に有利であるとは考えにくく、そのような行動がハードウェアとして準備されるという主張を根拠づけることは困難だろう。しかし、ハードウェアによる集団同調性のみを仮定して、同調しない個体への罰を文化的な行為と考えれば、罰を行う集団と罰を行わない集団の利益を比較することが可能になるだろう。つまり、われわれは模倣によって、どのような規範をもつ社会集団にもなりうる。どのような規範が「よい」規範であるかを決めるためには、実際に競争してみる必要があるだろう。

引用文献

- Bandula, A. (1965). Influence of models' reinforcement contingencies on the acquisition of imitative responses. *Journal of Personality and Social Psychology*, **1**, 589-595.
- Birch, L. L. (1980). Effects of peer models' food choices and eating behaviors on preschoolers' food preferences. *Child Development*, **51**, 489-496.
- Fehr, E., & Fischbacher, U. (2003). Third-party punishment and social norms. *Evolution and Human Behavior*, **25**, 63-87.
- Frank, G. (1999). Freud's concept of the superego: Review and assessment. *Psychoanalytic Psychology*, **16**, 448-463.
- Heath, J. (2008). *Following the rules*. New York; Oxford University Press.
- (ヒース, J. 瀧澤弘和(訳) (2013). ルールに従う NTT出版)
- Hobbes, T. (1651). *Leviathan*. (ホッブズ, T. 水田 洋(訳) (1992). リヴァイアサン (一) 岩波書店)
- Hume, D. (1739). *Treatise of human nature*. (ヒューム, H. 大槻春彦(訳) (1957). 人性論 (三) 岩波書店)
- Locke, J. (1689). *Second treatise of government*. (ロック, J. 宮川 透(訳) (1968). 「統治論」世界の名著27 中央公論社)
- Ohtsubo, Y., Masuda, F., Watanabe, E., & Masuchi, A. (2010). Dishonesty invites costly third-party punishment. *Evolution and Human Behavior*, **31**, 259-264.
- Smith, A. (1759). *The theory of moral sentiments*. (スミス, A. 水田 洋(訳) (2003). 道徳感情論 (上・下) 岩波書店)
- 瀧澤弘和 (2013a). 訳者解説 ヒース, J. 瀧澤弘和(訳) ルールに従う NTT出版 pp. 497-510.
- 瀧澤弘和 (2013b). 『ルールに従う』概要 ヒース, J. 瀧澤弘和(訳) ルールに従う NTT出版 pp. 511-522.
- 柘植尚則 (2003). 良心の興亡 ナカニシヤ出版

(2014年9月8日受稿, 2014年12月31日受理)